



「起業家精神について考えよう」

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

日本の経済が、大きく転換しつつある。景気の低迷からくる不況感、金融システムの信頼感の低下、大企業倒産の増加。その結果、失業率は5%前後になり、約350万人が職を探している状況にある。また、新卒学生においては希望する企業への就職はおろか、就職すること自体が厳しい状況にあり、就職内定を得られずに卒業する学生が10万人以上いるといわれている。

企業内では、「終身雇用」「年功序列」などこれまで日本型経営システムの特徴とされてきた部分が大きく変わりつつある。たとえば「終身雇用」とは、特定の企業に長期安定的に雇用されていることであるが、この制度は人件費の増大を招くと同時に企業側の社会保険や退職金の負担などの関係から徐々に減りつつある。また、勤続年数や年齢などを加味して、役職や地位などを決める「年功序列型」のシステムに関しては、企業がグローバル化するにつれて世界的に広く取り入れられている能力・成果を重視するシステムへと移ってきている。これまでのような「長く会社に勤めていれば出世できる」といった通念は崩れつつあるといえよう。

情報技術の発展も社会構造を大きく変えている。従来よりも様々な場面で「情報」が重視される傾向が進み、画一化された製品やサービスよりも、顧客一人ひとりのニーズにあった「細かさ」がますます要求されるようになってきている。さらに「スピード」というビジネスの効率性も求められてきたために、最近では外部企業の専門的知識・能力や資源を有効活用するアウトソーシングや、インターネットなどが取引関係に使用されており、社会や経済の構造が音を立てて変わりつつあるといえる。

このように社会構造が大きく変わる「変革」の時は、古い産業やビジネスの価値が相対的に低くなるのと裏腹に、新しいビジネスや産業が起こり、逆に「業」を起こすチャンスであるとも考えられる。変革期について考えるには、戦後日本の復興期を振り返ってみることが有用であろう。敗戦という経済・政治的な枠組みが大きく変化するなかで、積極的に自分自身で人生を切り拓いていく意欲と、「独創性」「創造性」に富み、主体的に問題を考えてきた先人たちの行動が、今日の日本経済の枠組みを築いてきたといっても過言ではない。

例えば1946年には東京通信工業（現ソニー）、1948年には本田技術研究所（現本田技研工業）が設立されるなど、今の日本を代表する企業が戦後の混乱の中で生まれた。また1957年には主婦の店ダイエー（現ダイエー）が、1958年にはヨーカ堂（現イトーヨーカ堂）が設立され、後に「流通革命」と呼ばれるような、小売業における変革の担い手となった企業が生まれたのである。

このように急激な社会変化が起きつつある時代では、従来の枠組みに固執する人材ではなく、積極的に自分自身で様々なことにチャレンジし、新しいビジネスや産業を起こすような、「起業家精神」「起業家的な資質・能力」にあふれる人材が求められている。「起業家精神」とは、自立性、チャレンジ精神、創造性、積極性、探究心であり、「起業家的な資質・能力」とは、自己責任で決断する能力やリーダーシップ、コミュニケーション能力、情報の収集・分析能力とそれに基づく判断力、問題解決能力、行動力である。

（参考文献）

板谷敏弘・益田茂編『本田宗一郎と井深大-ホンダとソニー、夢と創造の原点-』朝日新聞社、2002年

佐野真一『カリスマ-中内功とダイエーの「戦後」-』上・下、新潮社、2001年

年 組 番 ■名前

1 これまでの日本型経営システムの特徴についてまとめ、それがどのように変化したのか考えてみよう。

2 アウトソーシング、情報技術の発展について調べてみよう。またこのことが、日本型経営システムにどのような変化をもたらしたのかまとめてみよう。

3 日本経済がかつて経験した社会の変革期とはいつなのか、その時期にはどのような企業が生まれてきたのか調べてみよう。

4 これからの社会で必要とされる能力は何かまとめてみよう。

5 社会の大きな変化は人々にとって、「ピンチ」なのか「チャンス」なのか、みんなで話し合ってみよう。